

令和元年6月3日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K08874

研究課題名(和文) 地域住民参加型・早期医療教育システムの構築

研究課題名(英文) The construction of early medical education program benefitting from the interaction between students and local residents

研究代表者

大坪 芳美 (OTSUBO, YOSHIMI)

佐賀大学・医学部・教務職員

研究者番号：20152192

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 400,000円

研究成果の概要(和文)：地域と大学が連携し、地域住民と学生との直接的な交流を通し相互に貢献できる、地域住民参加型の実践的医療教育システムの構築を目指している。本研究では、以下の取組みの実践と評価を行った。(1)医学科1年の早期体験実習の一環として「地域高齢者交流」を実施(2)地域法人主催の行事で、地域住民を対象とした「医学生による健康チェック」を実施(3)地域住民の健康意識調査を実施

調査の結果、学生は地域住民との交流を通して、医療に対する率直な声に耳を傾け、人間の多様性を実感し、求められる医師像を具体的に描き、地域医療貢献への意欲が増したと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地域住民参加型教育は、実践的に意思疎通能力を学びながら、全人的な対処能力を身につけ、豊かな社会性をそなえた、患者が求める医療人育成に役立つことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop the practical medical educational system, in which the university cooperates with the local area and contribute mutually through a direct interaction between local residents and students.

As a part of the early exposure training program of the first year medical students, (1) "meeting promoting interaction between students and local senior residents" (2) "health check by the medical students and primary lifesaving method class for local residents" and (3) "health awareness survey of local residents" were conducted. Through interaction with the local residents, the students listened to frank voices of residents for the medical care. As a result of investigation, our trial shows the students realized human diversity and pictured the image of the doctor required concretely, which suggests that students' motivation to contribute to community medicine will be increased.

研究分野：医歯薬学教育

キーワード：コミュニケーション教育 地域交流 地域住民参加型

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

医療のあり方が変革されつつある現在、医学部においては豊かな人間性・社会性を備えた良医の育成が求められている。しかしながら近年の学生は、少子化・核家族化が深まる社会現象の変化に伴い、知識偏重の入試準備教育がますます低年齢化している傾向にある。そのため他人との交流が希薄になり、コミュニケーション力の低下、特に子供や高齢者など異世代の人々との意思の疎通を苦手とする学生が多くなっている。そこで学生が地域の人々との直接的なふれあいを教育の場とすることに着目し『地域住民参加型・早期医療教育システムの構築』の方策を得るといふ着想に至った。

2. 研究の目的

地域と大学が連携し、地域住民と学生が直接ふれ合い、地域住民の健康意識・活力向上に学生が貢献できる体験をさせる機会を導入する。そこで地域住民と学生との双方向型・対話型教育の効果を図り、地域住民参加型教育の評価を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、地域と大学が連携し、地域住民と学生との直接的な交流を通し相互に貢献できる、地域住民参加型の実践的医療教育システムの構築を目指し以下の取組みを行った。

(1) 地域高齢者交流実習

地域社会に根づいた社会福祉法人・社会福祉協議会に協力を求め、医学科1年の早期体験実習の一環として地域高齢者交流を実施した。交流の目的は高齢者とのコミュニケーションを実践的に学ぶことを通して、医師に必要とされる資質を理解し、モチベーションを向上させることにある。交流では主に、認知症予防体操や簡単な脳トレゲームなど医学生による健康講座を行い、さらに地域の高齢者とのコミュニケーションから、地域住民が求める医師像を探ることとした。

対象：2016年～2018年、医学科1年生319名と地域住民1170名。

方法①：学生 実習前後に、学生の高齢者のイメージについて「明るさ」「優しさ」「美しさ」「強さ」「温かさ」「楽しさ」「賑やかさ」「嬉しさ」「協調」「安心」について、10段階尺度のスケールを用いて回答させ比較した。また実習での学びや気付きについてレポートを提出させた。

方法②：地域住民 交流した学生の印象や学生との交流についてアンケート調査を行った。

(2) 医学生による健康チェック

地域法人主催の行事で、医学生による健康チェックコーナーを設置し、地域住民を対象とした『血圧測定』、『一次救命法講習』、『ロコモ
写真1
度テスト』等を行った^{写真1}。

対象：健康チェック実施に参加した学生

(延べ49名、実人数28名)

方法：活動終了後、「この活動が将来の医師像・看護師像に与えた影響」、「この活動から学んだこと・感想」について記載させ、教育のフィールドを学外に求め、実践的に学ぶ取り組みについて、学生のレポートにより



検証した。

(3)地域住民健康意識調査

学生の今後の活動の方向性を探るために、地域 住民の健康意識に関するアンケート調査を実施した。アンケートの内容は以下の通りである。

対象：医学生による健康チェックを受けた地域住民 553 名

方法：①「健康に関して不安な事」「健康維持のための取組み」を複数選択式で回答

②「医師に特に求めること」を二項目選択式で回答

③肝炎ウイルス検査、ピロリ菌検査に関する調査

4. 研究成果

(1) 地域高齢者交流実習

【学生アンケート結果】

回収率 95.0% (303/319)。高齢者イメージを実習前後で平均値をそれぞれ t 検定により比較した結果、実習前に比べ実習後は 10 項目全てが有意に肯定的に変化した(p<0.01)。レポートにも「暗い雰囲気イメージしていたが元気で明るかった」「高齢者に対するイメージが変わり、明るくて積極性があり社交的だと思った」などと記載されており、比較的健康的な高齢者と交流することで学生が交流前に抱いていた高齢者のイメージが、肯定的に変化したことが明らかになった。さらに高齢者との交流により学生は、高齢者が「わかりやすく、何度も説明しないと正確に理解しない」、「一人ひとり聞こえやすい音域が違い、左右差がある」ことに気づき、患者中心の視点やコミュニケーション力など医師に求められる資質を実感し、求められる医師像が具体化するとともに、医師への期待や責任の大きさを実感し、地域医療貢献への意欲が増したと考えられる。

【地域高齢者アンケート結果】

回答者 1170 名中 90%以上が、学生の挨拶・言葉づかい・態度について「とても良い・よい」と評価^{図1}し、医学生との交流についても「楽しかった」「ためになった」「元気になった」「また参加してほしい」と高く評価^{図2}した。

以上により、高齢者交流実習は、高齢者と直接ふれあうことで、求められる医師像が具体化し、地域医療貢献への意欲が増したと考えられる。地域住民が医療人育成の一端にかかわり、また学生が地域住民に活力を与え、相互に貢献できることが示唆された。

図1 学生の印象

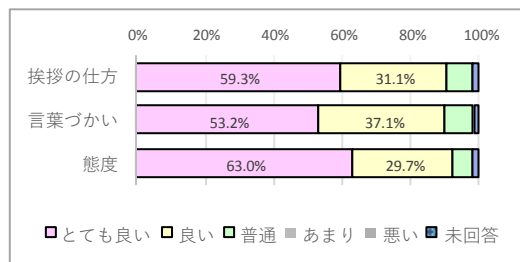
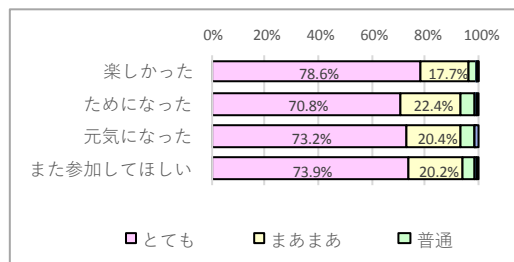


図2 地域高齢者交流に学生が参加して



(2)医学生による健康チェック

【学生の学び】

地域住民の健康チェックをおこなった学生は、年齢や背景・価値観も異なる多様な人々との交流で、医療についての率直な声に耳を傾けた。そこで学生は、地域住民の健康への関心の高

さを改めて認識し、医療と生活・社会との密接な関わりを理解し、地域住民に必要とされる医師像について深く考える機会となった。また「医師に求められるものは、病気を治すことだけでなく、患者の背景まで感じとれる想像力である」など様々な気づきを得た。さらに地域住民とのコミュニケーションから、医師に対する期待の大きさを実感する一方、医療に対する不信感にも触れた。また今後の課題として、ほとんど他人と交流せずに家の中で過ごしている住民や検診を受けない住民に、健康に関心を持ってもらう方策の必要性を感じ、地域を教育フィールドとした取り組みは、学生のコミュニケーション教育・モチベーション向上に効果があることが示唆された。

(3)地域住民健康意識調査

①健康に関して不安な事は、1位「体力の衰え」、2位「ストレスがたまる」、3位「足腰の痛み」であった^{図3}。また健康を維持するための取り組みは、1位「バランスの良い食事」、2位「適度な運動」、3位「十分な睡眠」^{図4}。

②医師に求めることは、1位「技術・知識」、2位「コミュニケーション力」、3位「痛みのわかる心」という結果^{図5}が得られ、医師の内面的な成熟と患者への共感をより強く求めていることが明らかになった。

図3 健康に関して不安な事

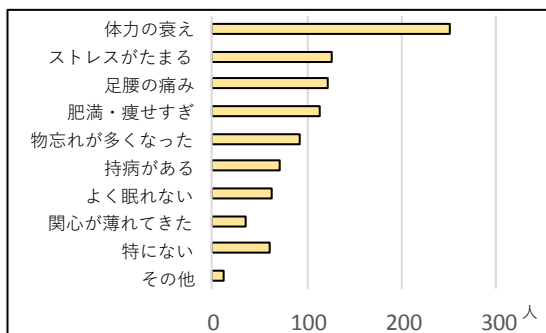
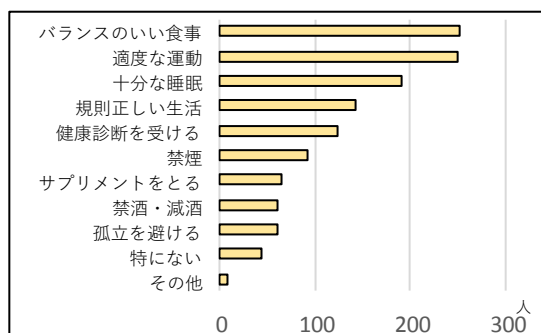


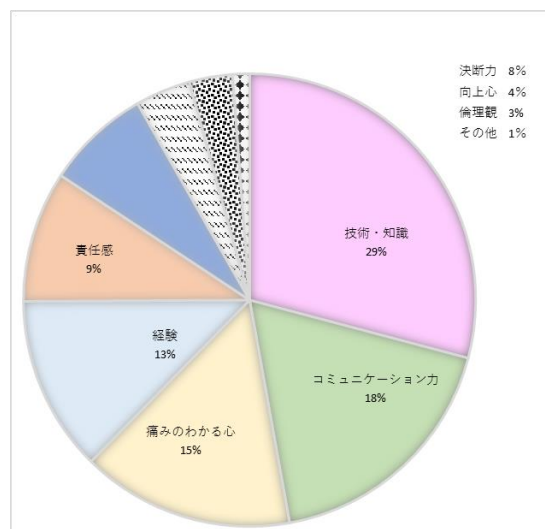
図4 健康を維持するための取り組み



以上のことから、地域と大学が連携した、地域住民参加型教育は、地域住民の健康意識向上・地域コミュニティの活力向上に、学生が貢献できる方策であると示唆され、持続可能な地域のコミュニティの形成に貢献できる、実践的教育へと発展する可能性があると考えられる。

③佐賀県は、肝臓ガンや胃ガンのワースト県である。今後の学生サークル地域交流の会の活動の方向性を探るために、肝炎ウイルス検査とピロリ菌検査について、地域住民の意識調査を実施し、98名から回答を得た。「検査を受けたか」との質問では、両検査とも「受けてない」が「受けた」を上回り、「不明」が、肝炎ウイルス検査

図5 医師に求めること



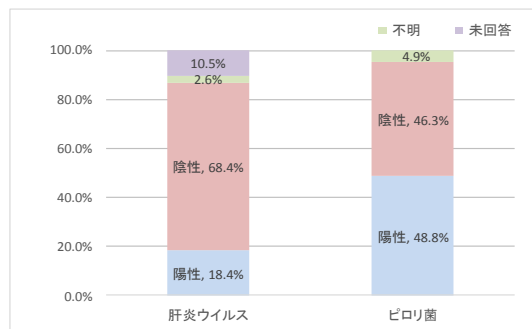
11.2%、ピロリ菌検査 4.1%という結果が得られ^{表1}、検査に関する関心の低さが示された。肝炎ウイルス検査の結果は 陽性 18.4%(7/38)、陰性 68.4%(26/38)、不明 2.6%(1/38)、未回答 10.5%

(4/38)。ピロリ菌検査の結果は、陽性 48.8%(20/41)、陰性 6.3%(19/41)、不明 4.9%(2/41) 図 6。検査を受けてない理由としては、両検査とも「検査のことを知らない」「毎年、健康診断を受けている」「医療機関で血液・尿検査を受けている」が上位を占めた。

表 1 受 診

図 6 検査結果

	肝炎ウイルス	ピロリ菌
受けた	38.8% (38/98)	41.8% (41/98)
受けてない	50.0% (49/98)	51.0% (50/98)
不明	11.2% (11/98)	4.1% (4/98)
未回答	0%	3.1% (3/98)



以上の結果から学生は、「一般の人は、定期健診や一般検査で全てがカバーされていることに驚いた」「肝炎検査やピロリ菌検査の啓蒙活動が十分でないのは残念だ」等と述べ、「地域住民と直接対話することにより、検査の重要性を認識させることができ、地域住民の健康意識の向上に役立つことができる」と今後の活動の方向性が明らかになった。

地域を教育フィールドとした地域住民参加型教育は、実践的に意思疎通能力を学びながら、豊かな社会性をそなえた医療人育成に役立つとともに、学生が地域住民の活力向上の一助となり、相互に貢献できるシステムであることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

江村正, 島ノ江千里, 藤井可, 大坪芳美, 坂本麻衣子, 小田康友 医学科大学入門科目の“進化形”としての「医療入門」 佐賀大学全学教育機構紀要 第 6 号 2018 p.9-15

〔学会発表〕(計 4 件)

①大坪芳美, 小田康友, 酒見隆信 地域貢献活動からの学び 第 51 回日本医学教育学会大会 2019

②江村 正, 島ノ江千里, 大坪芳美, 坂本麻衣子, 小田康友 医学科 2 年次におけるプロフェッショナルリズム教育の試み 第 50 回日本医学教育学会大会 2018

③小田康友, 江村 正, 大坪芳美 早期体験学習の一環としての矯正医療講義・施設見学の教育的意義 第 50 回日本医学教育学会大会 2018

④大坪芳美, 小田康友, 酒見隆信 医学科 1 年における地域高齢者交流実習の試み (第 2 報) -- 地域医療に対する意識の変化 -- 第 48 回日本医学教育学会大会 2016

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：酒見 隆信
ローマ字氏名：Takanobu Sakemi
所属研究機関名：国際医療福祉大学
部局名：福岡保健医療学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：30150410

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。